

英語における分析的動詞形式の發生

山川 喜久男

一 序

誰でも英語を學んで更に他の西歐語を學ぶ者にとつて第一に印象付けられることは、英語が他國語に較べ語の屈折變化が著しく單純で、細かな文法形式の呼應法則に煩わされることが極めて少いことである。その代り語尾の屈折や語中の母音の變化によつて表示されるべき語相互間の意味關係は、比較的に安定した語順と形態上獨立の一單位をなす關係語または文法形式語によつて、より明析にそして的確に表わされている。そして多くの場合語形の屈折變化に較べ語順や關係語は意味を表象する言語機能の目的に一層則應することが多いところから、英語は構造上の特徴として簡明で合理的な言語であると言ひ得ることとなる。

この様な他の西歐語に比較しての英語の特徴は、言語史上英語の蒙つた音聲變化と他國語から受けた影響に由來するものである。英語も一二〇〇年頃までのいわゆる古代英語 (Old English) の時期では、今日のドイツ語と同様あるいはそれ以上に多様で複雑な屈折變化の組織を持つていた。それが一二〇〇年以後一五〇〇年頃までのいわゆる中世英語 (Middle English) の時期では、古代英語の十分に屈折していた語尾の母音が一樣に弱い *e* に衰えると共に

英語における分析的動詞形式の發生

形態上の諸變化が次第に水準化され、十六世紀以後は中世英語の弱い *e* の語尾も音聲上は全く消え、屈折體系全般に互つて單純化が完成して今日のいわゆる近世英語 (Modern English) を傳えるに至つたのである。また言語系統の上から今日ほとんど無屈折な英語は、現代のドイツ語の祖である古高ドイツ語 (Old High German) と同じく印歐語 (Indo-European languages) 中の西部ゲルマン語 (West Germanic) に屬した屈折語であつた。動詞の例で言うならば、現代の標準口語法の英語では、弱變化動詞 *hear* の變化形は *hears, heard, hearing* の三形があるばかりであるが、古代英語では不定詞形の *hieran* に對し、直説法現在では三つの人稱と複數とにより *hiere, hier(e)st, hier(e)th, hierath*、過去では *hierde, hierdest, hierde, hierdon*、更に敘想法の現在と過去とで單數と複數とによりそれぞれ *hiere, hiereu & hiere, hiereu & hiere, hiereu*、命令法では單數と複數とにより *hier, hierath*、現在分詞は *hiereude*、過去分詞は *hieread*、そして不定詞の *to* に接する語形として *hiereune* という様に相異なる屈折語尾により多様な變化をしたものであつた。これを同語原であるドイツ語の *hören* の諸變化と比較對照して見るならば、古代英語とドイツ語との間に認められる親縁關係は明らかとならう。

このことはまた英語が、その同族言語であるドイツ語に較べ、古代英語期以後實に目覺ましい音聲變化を蒙つたことを知らしめることとなる。もつともドイツ語の場合でも古高ドイツ語から近世ドイツ語に至るまでそれ相應の音聲變化はあつたけれども、古い屈折變化の態勢はそのまゝ中高ドイツ語 (Middle High German) 以後の形態において保存されているのに對し、英語では中世英語以後古い組織の殻全體を脱ぎ去つてゐると言うことができる。今その歴史的經緯を述べることは本稿の主旨ではないが、一口に言つてこの變遷は古代英語期から中世英語期にかけて英國に

起つた他民族の侵入が契機となつて促進されたことは事實である。しかしこゝで注意したいことはこの様な外的な事情以外に、その根柢に元々英語に備つた音韻上の特質とそれによつて統語上の傾向という英語自體の中にある内的な要因である。我々が初めに擧げた英語の明析さとか合理性とかを考えるのは近世英語の現状を觀察してのことであるが、眞に英語の他の同族言語に對する特異點を探らうとするには、當然歴史的に英語の過去に遡り、今日の英語に認められる特徴のよつて來つた経過をその言語的必然性の中に見出さなければならぬであらう。一言語の特徴とか本質とかは結局その歴史的事實の探求によつて究明されるべき筈である。

このことは英語の場合古い屈折組織に代つて發生した新たな文法手段を考える際に一層必要となる。先にも述べた様に英語において古い屈折が消失するにつれ、それを補つて分析的な關係語または文法形式語が發達した。これ等の分析的言語形式の中には古代英語以來傳承されて居りそれとの相當形がドイツ語などにも見られるものと、中世英語期以後在來あつた言語材料を適宜に利用して新たに發生させた英語獨特のものがある。後者は分析語としての英語の性能を明かに例證するものであるが、前者の場合にも英語という特殊な言語環境の中にあつて相應の形態上並びに意味機能上の變遷を経て居り、同類の形式の中にも同族言語のそれに比較して英語の特異性を示していることが多い。要するに英語の本質的特徴は屈折形の消失という消極面と分析的形式の發生という積極面との兩面から、英語史上の事實に則して實證的に省察されるべきものである。このうち積極面とも言うべき分析的文法形式の發達ないし發生の面を、その最も顯著な諸相を呈している動詞範疇について逐次略述して見たいと思う。

二 「助動詞十不定詞」形

課題の性質上、英語の分析的動詞形式をばその發生の時期の順に従つて説くべきところであるが、前後の重複を避け記述の整理を圖つて、一應形態的觀點から諸形式の範疇を定めその上で考察を進めることとする。

先づ動詞の不定詞 (Infinitive) と結合する特殊な二類の動詞が古代英語に既に見受けられる。すなわち *can* (◇can), *may* (◇may), *shall* (◇shall), *dare* (◇dare), *must* (◇must), *ought* (◇ought), *will* (◇will) などがそれでこれ等はいずれもと過去形(または完了形)であつたが、現在の意に用いられた形態的に特殊な動詞で過去現在動詞 (Preterite-Present Verbs) と稱せられるものであるが、機能上でも動詞の不定詞をその目的語とすることの多い特殊なものであつた。例えば “I can swim” に當る古代英語は “ic eam swimman” であり、*eam* の原意は know で不定詞 *swimman* は今日の *swimming* に相當した名詞の機能を持ち *eam* の目的語として用いられ、全體でラテニ語の “scio nare” と同様 “I know how to swim” の意をなすものであつた。近世英語の *can* に見られる助動詞 (Auxiliary Verb) としての一般的用法は中世英語期に入つて發達したものであるが、他の過去現在動詞も同様に、多かれ少かれその他動詞としての原意を薄めて單に次の不定詞の動詞的意味に敘想的潤色を添える助動詞に推移している。この助動詞の意味變化と共に不定詞の性格も著しい變遷を蒙ることとなつた。中世英語以後語尾の母音が弱まり消失するにつれ、古代英語の不定詞の語尾であつた *-ian* が *-en* を經て *-e* となるか、または全然失われ様になつた。その結果不定詞と三人稱單數以外の直説法現在・敍想法・命令法・語幹など他の諸範疇に屬する動詞

の形態とが同一となり、不定詞としての一般用法を區別する形式的な標識が必要となつた。もと方向または目的を示す副詞的意味を表すために *en* に終る與格 (Dative) の不定詞の前に添えられた前置詞 *in* が、やがてあたかも不定詞の一部としてほとんど意味とは無關係に一般に表わされる様になつたのはそのためである。中世英語期ではもとの與格の *en* は *ene*, *en* と弱化して、終に古代英語の *swimman* と *swimenne* とが同じ *swim* に合體するに至つたが、前置詞 *in* も十三世紀以後は名詞的機能における不定詞の前にも添えられる様になつた。この點 *in* の語尾を留めているドイツ語の不定詞がその儘の形で中性の名詞として用いられていることと比較されるべきであつて、不定詞の形態における英語の分析化の現象として注意すべきものである。たゞ上に述べた助動詞との複合においては、動詞としての主な意味は不定詞によつて表現され、助動詞は意味上では不定詞の意味を潤色するに過ぎず、動詞としての面目は形態上で立てられるという特殊な結合であるため、不定詞はその動詞性を顯著に表わして *in* を伴わない古來の單獨形を近世英語にまで維持しているのである。

さて「助動詞+不定詞」の形式は、英語の動詞の活用が單純となり多くの語尾變化が廢れるにつれて、次第に頻繁に用いられ、微妙な敘想的意味を鮮明に表現することに寄與する様になつた。その第一に採り上げたいと思うのは古來の *Subjunctive Mood* (敘想法) に代る分析表現である。古代英語では今日のドイツ語に較べかなり徹底した敘想法の形態を保留していた。それが中世英語期に入り語尾が一樣に弱化したため敘想法と直說法 (Indicative Mood) との差別が消え、近世英語では *be*, *have* の様な特殊な動詞と *(e)s* のない三人稱單數現在形を除いては消滅して了つた。形態の消滅は自然古く敘想法を用いたところに直說法や分析的な代用形を用いて古い敘想法の領域を狭めること

となつたが、その中 *may*, *shall*, *should* などいづゆる敘法の助動詞 (Modal Auxiliaries) による分析形式は元々敘想法の動詞の喚起する主観的色彩によりふさわしい表現法として英語の精緻さを加へてゐる。例をば *may* は *can* の意の古代英語 *mag* に由来するが、早くからその原意を弱めて、古代英語の頃から “Whoever *may* say so, you need not believe him” や “Write to him at once so that he *may* know in time” になける様な、讓歩や目的を表わす副詞節に單純な敘想法と並んで用ゝられた。この用法は今日ではより古く “And oft though Wisdom *no*cke, Suspicion sleeps At Wisdom's gate” (Milton, *Paradise Lost*, iii. 686) (よつて時折智慧は目覺めはするが、疑惑は智慧の門邊に眠り續ける) や “Give me leave that I *may* turn the key, That no man enter” (Shakespeare, *Richard II*, V. iii. 26) (誰も入つて來ぬよう錠を下すことをお許し下さる) における様な純粹な敘想法に代つて一層普通なものである。また “Long *may* he reign!” の様な祈願文における *may* は十六世紀末から用いられ、 “Britannia rule the wave” (Thomson, *Rule Britannia*) (ブリタニア海洋の主權者たれ) における様な純粹な敘想法に、詩文または雅文を除いては、代る様になつた。次に *owe* の原意を持つ古代英語の *seal* に由来する *shall* は、未來や條件に關する豫想を表わす節に “Sit ye here, while I *shall* pray” (*Mark*, xiv. 32) (我祈らん間汝は此處に坐せよ) における様に、中世英語期に始まり特に近世初期から十八世紀までの間は古い敘想法に代つて盛に用いられたが、今日では雅文または古文を除いて一般に廢れ直説法がこの場合の普通な形となつてゐる。*shall* の敘想法相當の用法はこの様に敘想法自體と共に衰退したが、過去形の *should* (∧ *OE* *scoldie*) は一層原意を薄め漠然とした意味を表わす敘想法の代用としてよりふさわしい語となつた。その假想の意を強めた條件節における用法、た

とせば “Should anyone call while I am away, tell him to wait till I come” に代けるものは、十七世紀の後半に現われ今日まで一般的な用法をなしてゐる。またフランス語の “Il faut que vous partiez tout de suite” (= It is necessary that you leave at once) における敘想法 *partiez* に相當する “It is good that a man should both hope and quietly wait for the salvation of the Lord (Lam. iii. 26) (人エホヴァの救を望みかつこれを待つは良し) における様な *should* の用法は、十六・七世紀から形態上不備で曖昧な敘想法に代つて、この様な節の含む想念上の陳述内容を一層精密に傳える表現手段として一般化したものである。もつとも以上に擧げた用法に限らず一般に古い敘想法に代る用法において、口語體の現代英語に見られる傾向は上の様な助動詞によらずむしろ一層端的な直說法を用いる具體的表現に赴いて居り、更に附言すべきことは今日の米語の文語體において要求・提議・暗示などの内容を表わす名詞節にかなり盛に純然とした敘想法が見受けられることである。英語における今後の趨勢が分析的表現より更に端的で直截な表現に向つてゐることを示す現象ではあるが、こゝでは觀察の重點を分析形式の發生という點に留めて置く。

敘相法相當の分析形式と關連して、なお目的語としての名詞または代名詞と共に不定詞を從える *let* の用法を擧げなければならぬ。もと *leave* の意の *let* (<OE *letian*) は一二〇〇年頃からこの用法では一人稱または三人稱を行爲者とする命令法の助動詞と見做される様になつた。殊に *let us* の結合において勸誘の意を示す時には、この二語は互に收縮して “[let’s]” となり、あたかも一語の助動詞の態を呈して今日の口語に普及してゐる。この *let us* に相當する一語の助動詞が古代英語に發達してゐた。古代英語の “*Uton faran*” (*Luke ii. 16*) (= *Let us go*) にお

英語における分析的動詞形式の發生

る *uton* (または *wtion*) がそれであるが、この語はもと *go* の意味の *witan* の敘想法の一人稱複數現在形に由來し、それ自體で “*go we*” すなわち “*let us go*” の意を表わしたが、次第にその獨立性を失い他の不定詞を伴う重複的形式に用いられる様になつたものである。この *uton* は古代英語期だけで廢れたが、一人稱複數の代名詞を主語として表現する敘想法現在の用法は “*Then go we hear her*” (Shakespeare. *Much Ado about Nothing*, III. i. 32) (ではかの女の近くへ行こう) における様に近世初期まで殘存している。しかし一般の口語では “*let us go*” という新しい迂曲語法が “*go we*” に代えられる様になり、古代英語の *uton* の機能は敘想法の語形喪失に伴う「*let* 十目的語」という一層分析的な形式によつて引繼がれたわけである。

次に直接語形變化の消失に起因するものではないが、もとそれ自體の意味を持つた *shall* と *will* という特殊な動詞が不定詞と結合してそれまで無かつた未來時制 (Future Tense) を成立させる助動詞と化した過程を考えよう。元來古代英語では語形上時の區別を表わすものとしては現在形 (Present) と過去形 (Preterite) としか無かつた。未來の觀念を表わすのに動詞の現在形を以つてし、時に副詞その他の語句を添付しあるいは文脈から自然とその意味を喚起させるという語法は後世の英語にも見られるものであるが、一方時間的觀念をより明確に表現し記述描寫を一層精密にしようという要求が早くから萌していた。元々ラテン系の言語における様な時制 (Tenses) の諸形態を缺いていた英語では、從來からある特殊な動詞を利用することによつて當面の目的にかなえさせることとなつた。不定詞を伴つた古代英語の *secul* と *wile* とはそれ自體の原意を比喩的に轉じて未來の觀念を喚起する役に充てられたものとして、その意味上未來時制の形式語と轉化するのに比較的容易な語であつた。 *secul* はもと *owe* の意のゲルマン

語の語幹 **shall* に由来した語であるが、既に古代英語期において周囲の事情からの強制、話手の意志とは無關係に果さねばならぬ義務、必然の戒行き等の意から再轉して、未來に對する豫言・宣託・保證等をなすために、近世英語の "Now do I prophesy…… A Curse *shall* light upon the limbs of men" (Shakespeare, *Julius Caesar*, III. i. 262) (今私は豫言する、人々の四肢五體に呪が降るだろう) における様に、人稱の如何にかゝらず用いられていた。この様な用法から *shall* は中世英語期以後益々原意から離れて單なる未來時制の形式語と感ぜられる様になつたのであるが、一方また *choose*, *wish*, *desire* の原意を持つ古代英語の *wille* が、一人稱の場合は話手の欲望・意志をこめた未來に、二人稱・三人稱には主語の自主的または自然な未來の行動または出來事を表わすために用いられた。こうして初め *will* は二人稱・三人稱の行爲を話手の意圖命令によるものではなく相手の人または第三者自身の意志から自發的に出た行爲として表現しようという話手側の動機から殷懃な紆曲語法として用いられ、それが次第にその動機を忘れて一般的な慣用となり、終に二人稱・三人稱についての純然とした未來の助動詞になり了せた。その結果 *shall* は自然未來の助動詞としての職域を狭めて専ら一人稱の場合を分擔することとなつた。この兩語の間における職能の分歧は中世英語期の中に始まるものであるが、それが現代英語の標準文語に容認されるまでには幾多の紆餘曲折を経て居り、今日といえども教養ある英語國民の慣用に見られる實際は、決してこの標準用法とされるものを以つてしては律することのできない現狀である。それはこの二語がそれぞれ起原的に包蔵し多かれ少かれ想起させないことのない主觀性の濃い獨自の意味への連想、平敘文と疑問文とにわたる對話者相互間及び第三者の關係と文法上の主語の人稱と間に生じる意味と形式との錯綜、間接話法の被傳達文における形式上の拘束、更に加えて方言による慣用

の相異と浮動等諸原因によるものであつた。言語行爲の目的という観点からは確かに *shall* と *will* の未來の助動詞としての用法は缺陷の多いものであり、現に近世英語の中には未來表現の言語形式としてより統一のあるより能率的なものに赴こうとする傾向が現われている。一六一一年刊行の欽定譯聖書やシェイクスピアの英語では *will* が各人稱に通じて未來の意を含んだ助動詞として用いる傾向があつたが、現代では特に米語やアイルランド・スコットランドの方言において *will* (または *wi*) によるうとする傾きが顯著であるのもこの現われの一つである。しかしまた一面では英語に *shall* と *will* といういずれも敘想的色彩を持つ助動詞が適宜に使い分けられて、未來の意と共に對話者相互の微妙な思考感情のあやをある程度表象し得るといふことは、むしろ英語の表現の緻密性と融通性を増している點と言わなければならない。ドイツ語では未來の助動詞として *turn, happen, become* の原意の *werden* が發達して居り、*sollen* や *wollen* と違つて意味上主觀性の無い語であるため、純粹な未來の表現により適している。それ故言語史家は *werden* に當る古代英語の *weorðan* を英語の基本語彙の中から失つたことを英語の損失と見做す向きもあるけれども、上述の一事だけから見ても必ずしもこの判定に同意し難い様に思われる。

英語の分析的形式の發達が英語の表現性に寄與した事實は、助動詞 *do* の用法において殊に明かに認められる。古代英語の *don* に由來する *do* は古く特に十三世紀初めから十五世紀末まで *cause* の意の使役動詞に用いられたが、その意味から轉じて無意味に他の不定詞を従えて單獨な動詞形に代ることがまた古くから行われた。Shakespeare, *Hamlet*, III. i. 83 の "Thus conscience does make cowards of us all" (この様に良心は我々皆を臆病にする) はそういう迂曲語法を用いた例である。この場合の *does make* は起原的には "causes a making of" の意を持つ

たものであるが、リズムの關係を除いて意味上では單獨な *makes* とほとんど變りがない。この様に *do* による複合形がその動詞の單獨形と無差別に用いられる語法は、主に十四世紀から現われ十五世紀から十七世紀にかけて特に盛であつたが、十八世紀半ばからは *do* を持つ表現が強意的なものと感じられ單獨形と識別される様になつた。それは迂曲的形式が分析的形式に推移したことを示すものであり、他の助動詞の場合同様英語口語法の表現に變化と弾性を増す素因となつた。例えば “Why don't you work?” — “I *do* work.” と言ふ場合の様に、“*do* work” の複合形では、*work* に強勢を置けば *work* という動詞の表わす動作の意味を強めることとなり、*do* に強勢を置く時には *work* するという事實の肯定または主張を強調することとなり、この場合反駁の意を効果的に喚起することができている。總じて助動詞による分析形式においては、助動詞を強調することにより動詞そのものの意味とは別に專ら事實と可能性その他の敘想的觀念を強めることが自由にできるのである。*do* を初め他の助動詞が既出の動詞の反復を避け、あるいは附隨すべき構文を代表する統語上の特質も上述の表現上の性能と關連させて考へて理解されよう。

統語上の特質としてまた特筆すべきことは、*do* が疑問文や否定文において構文上不可缺な要素となり現代英語の配語法を整備させていることである。疑問文や否定文でも古くはやはり *do* は隨時に迂曲的に用いられたものであつた。その様に *do* は疑問文では中世英語期から、否定文では十五世紀末から現われ始めたが、それが一般的な語法にまで確立するに至つたのは、近世の口語法における語序の必然的要請に基付くものであつた。近世において英語の配語法が「主語+動詞」の順序を確立させ、疑問文においてもその順を狂わせまいという要請が一方に支配し、他方は動詞の形態素的部分を主語の前に置いて平敘文との形式上の差異を生ぜしめようという要請が支配した。この二つ

の要請の兩者ともを満足させるための折衷法として *do* が「主語＋動詞」の前に規則的に置かれる様になつた。また否定文では否定詞の *not* を主な動詞の直前に置いてその意味を打消せようという一般的な要請と、また「主語＋動詞」の順序を守つて主語から動詞の形態素的部分を離しまいという要請との兩者を満足させるため、「主語＋*do*＋*not*＋動詞」の配語法が確立されて、*do* が否定構成の一因子となつたものである。こうして現代の口語法ではドイツ語の “*Ich sage nicht*” に當る十五世紀の英語における “*I say not*” は “*I don't say*” となり、ドイツ語の “*Bringt er……?*” に對し “*Does he bring……?*” の形式が標準化する様になつた。この様な屈折語における形態素の機能を果すべき分析的統語法の要素として、*do* は他の助動詞同様簡易な小詞である。この點から見てこの發達は分析的言語としての英語の特徴を成す一要因であり、総合的言語であるドイツ語が同じ機能をなす語を持たないのは、その様な統語的形式語の發達を必要としなかつたためである。

三 受働態と完了形

次に過去分詞 (Past Participle) を要素とする分析形式に移る。それには先ず受働態 (Passive Voice) がある。この形式は古代英語期から既に見られたが、それを述べる前にこの形式と意味上の關連があり心理的にその以前の段階に屬する形式を考えて見よう。英語の受働態は「*be* (またはその他の自動詞)＋過去分詞」という分析法によつて形成され、その適用は動作または出來事の行爲者が知られないかまたはその意識が話手の腦裡に明瞭には存在しない場合に行われることが多い。この様な場合ギリシア語やラテン語の様な屈折語では行爲者を表現しないで済む様に使

える動詞形を持つている。中間態 (Middle Voice) または再歸態 (Reflexive Voice) と稱する語形がそれで、それに相當する近代語的形式は再歸代名詞を動詞の目的語として添えるものである。例えばフランス語の “La porte s'ouvre” (The door opens itself) における *s'ouvre* は、その收縮形により形態的にも中間態の趣を傳えている。英語でも *oneself* を目的語とする語法は近世英語にもよく見られるものであるが、大凡の傾向はこの形式的な目的語を落し、元來の他動詞が自動詞化するか、またはより精確な「*be* 過去分詞」の分析形式によるうとして居り、言語構造の論理性を指摘している。

この様に英語では古代英語の時期に既に分析的な受働態の形式が存在していた。古代英語の過去分詞は *beon* (be) または *weorþan* と結合して受働態を成した。 *beon* と *weorþan* の使い分けは、今日のドイツ語の受働態における *sein* と *werden* のそれ程には確然としたものでないが、ほど前者は状態を後者は動作を表わす場合に用いられた。この中 *weorþan* は十四世紀における Langland の *Piers the Plowman* にまだ *worþ* の形で未來の意の受働態に用いられたが、その後は廢れたため、英語の受働態の助動詞は *be* だけとなり、今日 “*The gate is shut*” と言う時「閉じてある」という一時的状態と「閉じられる」という完成した動作との兩者を意味する不便を生ぜしめている。しかし近世においてこの短を補う二種の新形式が發達した。一つは後に述べる完了時制 “*has been shut*” の形式であり、他は *be* に代る *become, come, get* 等とわゆる不完全自動詞 (Incomplete Intransitive Verbs) の用法である。この中殊に *get* は十七世紀半ばから用いられ始めて、 “*A man gets driven into work*” (Wells, *New Miscellany*) (人間は仕事に驅り立てられる) における様に現代英語の口語に *be* の短を補う受働態の助動詞としてその

英語における分析的動詞形式の發生

勢を浸潤しつつある。古代英語の *weorðan* の機能は輕調で遙かにその任に適切な近世英語の *get* によつて引繼がれたわけである。

次に過去分詞が *have* に伴う完了形 (Perfect Forms) は受働態より後世の發達に屬する。古代英語の散文では、例えば "Tha Beornas *hafdon* swithe wel *gebud* hiera land" (King Alfred's *Orosius*) (= The Perimians had their land very well cultivated) と云ふ時 *habban* (Have) の過去形 *hafdon* と過去分詞の *gebud* とはまた過去完了時制 (Past Perfect Tense) を成すまでに結び合つてはいないが、しかしさういう融合への過渡にある例とすることが出来る。この様に初めは元々所有の意を持った *have* とその目的語に對する敘述的關係にあつた他動詞の過去分詞とが互に引き寄せられ、古代英語の末期には過去分詞が形容詞としての語尾變化を失うと共に、*have* は益々その原意を薄める様になつた。しかし「*Have* + 過去分詞」が一般に完了の意を表わす複合時制を確立したのは十四世紀に入つてのことである。一方古代英語期に過去分詞の持つ完了の意味が自動詞の場合 *beon* (be) と結合して、同類の形式を生ぜしめた。こうして一時今日のドイツ語の「*haben* + 過去分詞」と「*sein* + 過去分詞」とに相當する二形式が、それ／＼異つた職域を受持つて並存していたが、中世英語期には既に無意味な形式語と化しつゝあつた *have* が次第にその適用範圍を伸長して行つた。この様にして *have* は先ず目的語を伴わない動作動詞へ、更に自動詞特に運動の動詞へも結合し、果ては一二〇〇年以後には *have been* の形をも生じて、*be* の領域を逐次侵略した。こうして中世英語期には「*Have been* + 過去分詞」という受働態の完了形が成立し、また「*Have* + 過去分詞」という不定形が未來の助動詞その他とも複合し得る様になつた。そして近世に入つてからは十六世紀末に後に述べる *-ing* 形にも適

用されて *have been* ~ *ing* の形式を成立し、いよ／＼完了時制の體系を整備するに至つた。なお *be* による完了形も十七八世紀までかなり廣く用いられたが、その後は *gone, come, fallen, risen* など往來・運動を表わす自動詞と共に専ら状態を表わすために用ゐられ、"The tree has fallen" (cf. G. "Der Baum ist gefallen") に對し、"The tree is fallen (= lies there)" を意味上にも區別する様になり、表現の精密化に資している。

この様に現代英語における時制の體系は完備されたが、現實の使用に際しその各形態の差に應じた用法の確立を見るまでには近世に入つてからもなお數世紀の浮動期を経過しなければならなかつた。近世初期にはまだ單獨時制によつて複合時期に代へ過去を現在完了や過去完了の意に用いる様な傾向があつたが、十八世紀半ばから今日の様な精確で周到な慣用が確立されたものである。もつともラテン語の綿密な語形變化の組織を引繼いだフランス語における大過去 (*Plus-que-parfait*) と前過去 (*Passé antérieur*) との形態上の差を英語の過去完了は缺くなど不備な點もあるが、そのフランス語でもある點では英語の過去形と過去進行形との區別に類似した定過去 (*Passé défini*) と半過去 (*Imparfait*) との區別において、少くともパリや北部地方の口語では定過去が消失し、その代り現在完了がその意味に用ゐられているため、半過去の "I *servais*" と現在完了の "I *was writt*" との相異は、英語の "I *wrote*" と "I *have writt*" との相異とは全く違つて、不合理で複雑な時制體系の一部を成している。英語の現在完了はまたドイツ語のそれに較べてもその用法の過去との區別がより嚴格であることなどを考え合せて、合理性に富み表現價値の豊かな文法形式として發達し了せたものと認めざるを得ない。

完了形に關連してなお注意すべきなのは、十七世紀半ばに生じ今日に至る口語に普通な、"Well, Ma'am, *have*

you got anything to say?" (Dickens, *David Copperfield*) (で何かおつしやることがおありなのですか) における様な *have got* である。この句が現在完了の形式でありながら意味は單獨な *have* と同意の現在を表わす句として近世英語の口語に一般化したことは統語法上の理由によるものである。それは前述した助動詞による分析形式が近世英語の配語法の確立に寄與したと同じ様に、"*have you got?*," "*have not got*" の類型に添うためには好都合は形式であつた。また現代米語の口語において所有の意の *have* が一般の動詞並に扱われ、"*do you have?*," "*do not have*" の語法が行われていることも比較されるべきものである。*have got* の發生もまた英語の分析的本質に所以する一現象と言わなければならない。

四 進行形

完了形と共に近世英語における時制體系の整備に與つた今一つの重要な要素は進行形 (Progressive Forms) である。この「*be + ing*」の形式は他の同族言語に類を見ない英語獨特なものであるが、その發生の考察には先ず形から取り掛からなければならない。形態上からのみ言えば今日の *-ing* 形は古代英語の *-ung*, *-ing* の後を繼ぐもので、それは動詞の語尾に添えられて動作を表わす一種の抽象名詞を造る接尾辭であつた。今日の動名詞 (Gerund) はこの形からの獨特な發達であり、十四世紀のチヨーサーの頃から目的語に直接し副詞に修飾される動詞的機能を發揮し始めたものである。

さてこの動詞的名詞形が中世英語期に "*engaged in*" の意の前置詞 *in* または *on* に従つて、"*And as he was*

in making of his lamentacion” (*Gesta Romanorum*) (そして彼が歎き悲んでいた時に)における様に用いられた。この前置詞 *in* (または *on*) は短縮して *a* となり、更に脱落する様になつたが、*-ing* 形の名詞性は近世後期の方言や卑語にしばしば見られる。“He’s a going out with the tide.” (Dickens, *D. Copperfield*, XXX) (潮に引かれて行つちやうところなんです)における様な例にその跡を留めている。今日の進行形における *-ing* 形は形態の上ではいかにもこの様な動名詞からの發達である。(なお「前置詞+動詞的名詞」のこの用法については、ドイツ語の “Wir waren gerade am Essen” (= We were just eating) が比較される。)

しかし進行形の表わす意味を考え、その *-ing* 形は形容詞の機能を持つ敘述性の豊かな現在分詞 (Present Participle) と見た方が妥當であろう。このことは歴史的にも實證されることが出来る。既に古代英語に今日のドイツ語の *-ende* に當る *-ende* に終る現在分詞が *beon* (*be*) の變化形と結合して、*“thæt scip wes ealne weg vernende under segle”* (Alfred’s *Orosius*) (= The ship was always running under sail) における様に今日の進行形に當る表現をなすことがあつた。この分詞形の *-ende* が中世英語では *-inde* となつたが、十五世紀頃にそれ自體の形態を没して前述の動名詞形 *-inge* に合體することとなつた。つまり古い現在分詞はその形態を失つたがその機能は *-ing* 形の中に受繼がれて居り、進行形における *-ing* 形も古い現在分詞の用法を繼承したものと云つてよいわけである。

その進行形も中世英語期から近世初期にかけては複合動詞の形態として未成熟の状態に浮動した時期である。それが *be* に續く「前置詞+動名詞」の連立という形態から「*se*+現在分詞」の複合形に成熟し、單獨な動詞形に對し今日の様な明確な意味機能の分化をなした了したのは、十六・七世紀の過渡期を経過した後のことであつた。十七世紀以

降進行形は單に時間的繼續の意味ばかりでなく、生彩な表現や主觀的印象の描寫にふさわしい文體的效果を發揮して、完了形・未來形・受働態にまで自在に融合し得る英語の分析的時制體系における樞要な組成素因にまで發展した。こうして十八世紀末には“*The house is building*”に對し、精確な“*The house is being built*”という分析形式を發達せしめた。この中前者は動名詞の受働態形が發達しない段階にある前述の“*The house is in building*”という構造において β を落して十六世紀半ばに用いられ始めたもので、一種の潛勢的な受働進行形として十八世紀以後次第に盛に用いられたが、形態上より擴充した“*The house is being built*”の發生によりまたその勢を挫かれて行く運命となつた。

進行形が殊に近世後期の作家により記述描寫の精密さと微妙な心理的效果を狙つて見事に驅使される性能について、こゝにその個々の場合を網羅することは到底許されないが、次にその中特に注意される二三の現象を擧げてその一斑を窺うとしよう。一つは進行形が“*No, I'm being quite serious*” (R. H. Benson, *Loneliness*) (ふゝえ、私はほんとうに眞剣なのです)における様に、心的状態を表わす「 β +形容詞」に適用される十九世紀末以後に見られる新しい表現法であるが、この場合進行形はその状態に對し特に相手の注意を惹きその意識を刺戟させる力を持つてゐる。同じく新しい用法として“*She'll be getting these to her house next*” (Galsworthy, *White Monkey*, I. 1) (この次にはこれ等を家に連れて來る番だろう)における様な未來の助動詞に接する特殊な進行形では、*will*によつて連想され勝ちな個人の主觀的色彩を防いで自然な成行きだけを浮き立たせ、純粹な客觀的未來を表わす力を發揮する。同様に“*I must be going again immediately*” (G. Elliot, *Moll on the Ploss*, VI. xi) (もうすぐ行かなければ

ばならないのです)では、進行形は *must* によつて喚起され勝ちな話手の意志に基づく主観的必要の意を取り除いて空観的必要の陳述となし、自然で隠やかな會話口調を醸し出している。

後の二つの例に見られる進行形の一面はこの形式がしばしば、未來時制の代用とされる所以を悟らせるのであるが、また現代英米語の口語體に浸潤しつつある「*be going to* + 不定詞」の形式が *shall* や *will* による未來表現に代るものとして好まれてゐる事實とも關連して考えるべきものである。例えば、「*You're all going to get scrambled eggs*」(C. Young, *Blondie*) (みんないり卵にするわよ)における様な用法であるが、*are going to* はもとフランス語の「*le vais* + 不定詞」における現在形 *vais* と同様近世において行動への移行の意から轉じて近接した未來の動作またはそれへの用意の意を表わすに用いられたのが、更に前述した *shall* や *will* の主観的色彩による意味の不純と混亂を除くより能率的な純粹未來の表現形式となり濟まそうとしてゐる氣運を感じさせるものである。こゝにもまた新しい分析的文法形式への動向が看取されよう。

五 “*have a look*” 型

以上英語において動詞の文法範疇と認められてゐる分析形式につきその發生の過程と動向を眺めて來たのであるが、最後に上述の文法形式と關連して考へてよいと思はれる一つの形式を指摘して置きたい。特に近世の口語に動作を表わす極めて普通な動詞の單獨形が、同形の名詞を *have* またはその他動詞の目的語として添える連語形によつて代えられようとする傾向が見られる。*look* に對して *have a look*, *drink* に對して *have a drink* を用ゐるのがその

英語における分析的動詞形式の發生

例であるが、同類の句をな若干列擧すれば、*have a smoke, have a swim, have a wash, have a talk, take care, take notice, give a kiss, give a kick, make (a) reply, make start* 等である。これ等の中中世英語期から見られるものもあるが、殊に *have* によるものは十九世紀以後の口語に好んで用いられている事實は、次の様に説明され得るであろう。先ずこれ等の句の中普通 *have* は弱く、次の名詞は強く發音され、音聲上にも *have* は動詞としての形態素的要素に過ぎず、動詞としての主な動作の意味は名詞によつて表現されていることを示している。文體上から言えば動作そのものを具體的に表象する效力を持ち、また例えば “for she has had a long walk” (Dickens, *Old Curiosity Shop*, VI) (長しこと歩いてお出でなんだからね) における様に名詞に適當に形容語句を添えることができ、表現の緊密化を圖り得る便宜を持つている。しかしこの際特に注意したいのは、上の(二)に述べた「助動詞+不定詞」の複合において發生的にも特殊な動詞がその目的語として不定詞という名詞機能の語形が添えられた構造と、*have a look* の構造が趣を等しくしていることである。そして殊に現代米語において *have* が普通の動詞並に *do you have?*, *do not have* という分析的活用をなしていることを思えば、それに對して *do you have a look?*, *do not have a look?* は二重の手順を踏んだ分析的動詞表現と云うことができるであろう。言語現象の發生過程の上から、英語の特徴を示す分析的動詞形式と關連してこゝに擧げて置いてよいものと思う。

六 結

以上限られた紙面に英語における分析的動詞形式の主なるものにつき、發生的にその概觀的略述を試みた。極めて

概括的な記述であるため、まだ／＼採り上げるべき現實の諸相でこゝで言及し得なかつたものも少くない。今思いつくまゝその一二を挙げて見るならば、*dream a dream, live a happy life* などゝわゆる同族目的語 (Cognate Object) を従える表現法は、(五) に述べた形式と関連して考察すべきものであろうし、また *abandon* の代り *give up* を *extinguish* の代り *put out* を用ひ、單獨な *add, bow* を強めて *add up, bow down* とする様な、いゝわゆる動詞副詞結合 (Verb-Adverb Combination) の近世的傾向は英語の本質に淵源する發展性のある分析的動詞表現として考え合わせて然るべきであつたらう。

とも角以上に挙げた數種の分析形式を、その發生ないし發達が英語における綜合的言語手段の衰退に伴う歴史的必然に源を發するものであるが、それが英語の構造に根差した本質的特性をなして、絶えずより明析なより具體的なより表現性に富む言語手段を求めて推移している動向の現われであるとして、觀察し記述を行つた。けれどもその様な主旨に基付いて英語の特質の一斑を指摘した概観の中にさえ、それとは異つた單純な直截的形式への志向を示す現象に逢着して居り、過去から現在に及び更に將來にまでわたる英語の統語上ないし文體上の一層顯著な趨勢はまた別な面に求めるべきであることを示唆されるのである。

畢竟一言語の本質とか性格とかは言語史上の事實から歸納されるべきであることは勿論であるが、それは諸々の言語現象に對する各面からの餘すところのない徹底的省察を俟つて初めてなされ得るものである。若しまた研究の對象が文學的語句の場合であるとすれば、更に文化史の背景に準據した比較文體論の領域にまで我々の視野を擴大しなければならぬ。要するに我々に殘された今後の課題は單に文法形式に限らず廣くに言語事實の全般にわたり、一

定の方針に基付いた順に従つて着々と一々の現象につきその表現價値を發生的にもまた記述的にも検討して行くこと
であろう。以上はたゞ英語史の通時的觀點に立つて文法的動詞形式の分析過程に附隨した動向の大略を實證的に素描
することを圖つたものに過ぎない。